

花王・教員フェローシップ
NPO法人アースウォッチジャパン
2017年度

モンゴル大草原の野生生物・報告書 (Wild life of the Mongolian Steppe)

(2017年8月6日(日)～8月19日(土))

品川区立鮫浜小学校 吉水 恵

1) プロジェクトの概要

- 調査名：モンゴル大草原の野生生物
- 調査期間：2017年8月6日(日)～8月19日(土)
- 場所：モンゴル国ドルノゴビ県 Ikh Nart 自然保護区
(首都UBの南東約300kmに位置する約66,600haの岩場や低木、草地、砂地などのエリアである。1996年に保護区に指定された。)



- 調査の目的：保護区内の野生生物の生態調査

各生物の個別の生態調査に加えて、相互にどう影響し合い共存しているかを解明する。野生動物同士のみならず、保護区内の家畜との共存も含め、保護区全体の最善の保全方法を調査により導き出す。

2) 参加メンバー

・デンバー動物園から

- ・Kerry (Denver Zoo の研究員、細やかな気遣いでみんなをケアするリーダー。毎日夜遅くまで研究用ゲル内でサンプル調査をしていた)
- ・Emma (Stanford 大学の学生、Denver Zoo と共同で肉食小動物の研究を行う。動物オタクで動物のかわいさを独り言のようにつぶやく)

・アースウォッチボランティア

- ・Robert (Bob) (アメリカから4回目の参加、ウィスコンシン州で40haのフルーツ農場を経営していて素晴らしいカメラと撮影の腕の持ち主)
- ・Nino (アメリカから4回目の参加、Bob とカップルで、花や虫にとっても詳しい。ピーナッツバターを愛し、農場ではハーブ担当だそう)
- ・Rebecca (アメリカから初参加、NYの名門女子高で理科を教えている教員、クリアな発音で話してくれるので英語が聞きやすい)
- ・Emily (カナダから初参加：Ph.D を持つ動物学者。国立公園内で大型哺乳類を調査している、動物ジョーク連発のベジタリアン)
- ・Manuela (ドイツから初参加：20年近く前にモンゴル大使館で働いていたこともあるジョークを飛ばしまくる秘書、モンゴル語に堪能)

- Osamu (日本から13回目の参加、さすらいのアースウォッチャー、サンダラーつでアフリカでも南米でも行くつわもの、サムと呼ばれる)
- Kinuko (花王教員フェローシップのもう一人の参加者、何時間歩いてもペースが落ちない体力と脚力を持つスポーツウーマン)

- モンゴル国立大学学生たち
- ベースキャンプ運営スタッフたち



全員で記念にパチリ→

3) 調査について

ベースキャンプに到着した日の午後、さっそく各プロジェクトの担当者からボランティアにブリーフィングが行われた。全部で8つのプロジェクトの説明を受けたが、うち1つ、Lark (ヒバリ: Ikh Nart 保護区内では3種類のLarkが観察できるとのこと)のプロジェクトは実施されなかった。Larkを2時間、観察して数を数えたり、種類を同定したり、動きを記録すると説明を受けたが、ボランティア内からも、①遠目にヒバリである判別できるのか②2時間のうちに飛んでいってしまわないか、と言った疑問や質問が相次いだ。実際計画や準備が不十分だったようである。残りの7つについては、担当者が調査の仕方や使う道具の説明などを細かくしてくれた。

事前にある程度の予習はしていたが、さっそくテクニカルターム(専門用語)を連発されて困り、辞書とにらめっこしながら説明を聞いた。私は一緒に聞いて回ったのがEmilyだったので、彼女にテクニカルタームの意味を聞くことができ、助かった。そして今後、毎日食事をするゲル内のホワイトボードで、次の日にどの調査に同行するか、を自分で書き込んでいくことになる。



説明をうけているところ



予定を書き込むホワイトボード

ほとんどモンゴル人学生が修士課程に所属していて、修士号取得を目指しているようで、そのお手伝いをするのだな、と最初に認識した。

調査1: クロハゲワシ (Cinereous vulture) のヒナ (平均生後100日前後) の生態調査と

タグ付け

- 担当者: Tugsuu (ツグス): キャンプスタッフの獣医
- Serchee (セルチェ): モンゴル国立大学の修士課程の学生
- Zaya (ザヤ): モンゴル国立大学の修士課程の学生

春の調査で、Ikh Nart 自然保護区内には今年67羽のハゲワシのヒナが生まれたことが、その巣の位置と共に確認されている。今回の調査では、それらのヒナの現在の生育状況を測定し記録した。一羽一羽の両翼と足に識別番号をつけ、体長や翼、くちばしの長さ、体温、体重、口内の餌の残骸や微生物の採取など、細かく記録をとる。ヒナの生存率が、体の大きさや外敵の種類、餌の種類や雌雄の差などによって異なるのかどうかを、年々調べているが、母数が少ないので継

続的な観察により、信頼に足るデータに近づけているようだ。クロハゲワシは、ヒナを人間が触ったり巣から運び出してまた戻したりしても、親鳥はヒナを放置したり育てなくなったりすることはないので、安心して調査ができた。ヒナはまもなく巣立ち、中国や北朝鮮、韓国などに「渡り」をするとのこと。韓国の研究機関との連携もとっているようで、実際に韓国に留学しているモンゴル人院生もキャンプに来ていた。

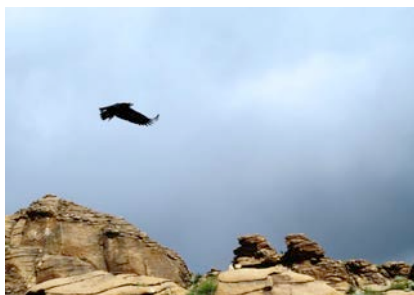
※感想

生後100日程度とはいえ、既に体長は1mを超える大型鳥類のハゲワシ。その大きさや迫力、間近に獰猛な猛禽類を見ることができたことに、とても感動した。巣に近づいてもまだ飛べないのでおとなしく捕まる個体もいれば、何とか飛んで逃げようとする個体もいる。飛んだとしても、せいぜい1キロほどを低空飛行するだけなので、目で追って着地してから再び捕まえて調査できた。しかし、中には育たず死んでしまっていたヒナもいて、大型鳥類とはいえ厳しい自然の中では、順調に育つとは限らないことが分かった。この調査期間だけでも、見たり聞いたりしただけで3羽のヒナは死んだ姿で発見されていた。

ところで、クロハゲワシは死肉を食らう scavenger なので、保護区内できちんと餌（動物の死体）が食べられているのか気になった。Kerry に尋ねてみると、以前は野生動物の死体は多くを持ち帰って調査していたが、クロハゲワシのことを考えて最近は持ち帰る量や回数をコントロールしているそうだ。



がけの上、木の上などの巣



あ、飛んで逃げた！



追えっ！



つかまっちゃいました



体中のサイズをはかる



タグをつけて渡り調査に生かす



こんな低木（約2mほど）の上にも巣が



実に凛々しい姿

調査2：アルガリ (Algali)、シベリアンアイベックス (Ibex) の生態調査、観察

○担当者： Khuderee (フッドレー)：モンゴル国立大学の修士課程の学生

アルガリは野生のヒツジ、アイベックスは野生のヤギでいずれも乱獲により絶滅危惧種に指定されている。発信機を取り付けた個体を、テレメーターにより発見して個体数や生息場所の調査を行う。Ibexについては、生まれた子ヤギの生存率が、体の大きさや外敵の種類、餌の種類や雌雄の差などによって異なるのかどうかを、年々調べている。ただし、アルガリもアイベックスも非常に警戒心が強く、なかなか近づいてこないのが、テレメーターが反応している様子を見ることはできなかった。よって、保護区内を歩きながらの双眼鏡での観察が主な活動であった。毎年9月のチーム4が、アルガリ、アイベックスの捕獲と発信機取り付けを行うとのこと。また、この散策中に、家畜の馬の群れを追うオオカミらしき足跡を発見して、担当のフッドレーは大変に喜んでいて、めったにオオカミの、たとえ足跡だけでも出会える機会はないそうで、何枚も色々な角度から写真を撮っていた。

※感想

この調査が最もボランティアメンバーに好評だった (かもしれない)。担当のフッドレーは素晴らしい足腰と視力の持ち主で、どんな岩場もするすると難なくのぼり、さらには1キロ以上離れた岩場から覗くアイベックスの耳や、アルガリの角を一瞬で見つける。また、生き物が本当に好きで、きれいな鳥の声を聴いて、「あれは何？」と鳥にも詳しいNinaに尋ねたり、足元の小さな虫を見つけて「これは〇〇だよ」と教えてくれたりと、好青年。かなりのスピードで岩場も歩くので着いていくのが大変だが、女性が多い場合はゆっくり歩いてくれたり、自分の双眼鏡を素早くセットして全員にのぞかせてくれたりと、とても楽しい調査だった。フッドレーは調査し足りないらしく、キャンプのメンバーが去った後も数日残り、まだ調査を続けるとのことだった。



軽快に歩く Khuderee



テレメーターを準備



散策中、わずか50mほど先に、2頭のアイベックスが



約500m離れている



ワラワラ出てきました。



オオカミの足跡

調査3：小動物 (Small mammal) 生態調査

○担当者： Remo (リモ)：Ikh Nart 自然保護区で働く職員

Oogii (オギ) : モンゴル国立大学の修士課程の学生

毎日夕方に、保護区内でワナを200個(100個ずつ2か所に)しかけ、翌朝見に行く。1週間ごとにワナの設置場所は変える。粟をピーナッツバターであえたものを餌に、中に入ったら出られなくなるような筒状のアルミのボックストラップを使用。捕獲した個体の体重、体や尾の長さ、雌雄の判別などを行って記録し、耳に識別番号のタグをつけて放す。平均して毎日3~6匹ほどがトラップにかかっており、それらはすべてが、跳びネズミ (Jerboa) かハムスター (Hamster) であった。これらの調査については、保護区内に生息している小動物の種類はすでにされており、新種を探す目的ではなく、大体の生息数や生息地、分布把握のための捕獲である。また、すでに識別タグが着いている個体の再捕獲 (Recapture) も多く、間隔をあけずに毎日トラップにやってくる個体もいた。再捕獲を繰り返しては、個体数の把握が困難ではないかと質問したが、それを含んでの予測をたてるとのこと。より正確に個体数や生息分布を知りたいければ、さらに多くのワナを設置したり、餌の種類を変えたりする方法もあると、動物学者の Emily が解説してくれた。

※感想

最初は、何もない広い草原にこんなトラップを置いて、いったい何がかかるとかと思ったが、見事にハムスターや跳びウサギがかかっている、驚かされた。捕まえて記録をとった後に話した跳びネズミが、フラフラと私の足元にやってきて穴を掘りだしたので、なるほど普段は土の中にいるのだな、と理解した。毎日のようにワナにかかっている個体もいて、どうやら「ここに来れば、餌がある上に捕まっても放してもらえる」と学習しているようだった。参加者たちも、耳にタグをつけたり記録をとったりしたが、ドイツ人のマニュエラが「ほら見て、捕まっているのはオスばかり。やっぱりオスはダメね~ (メスと違って!)」とジョークをとばすと、ボブが「いやいや、オスは賢いからここを安全な餌場と思って毎回来てるのかもしれないよ」と言って、みなで大笑いした。



ボックス型トラップ



100個×2のトラップを
みんなでチェック



ハムスターがはいってる!



体重や体長を測って記録



これは跳びネズミ



私の足元に穴を掘る跳びネズミ

調査4 : Ikh Nart 保護区内の植生調査 (野生生物と家畜の食性調査)

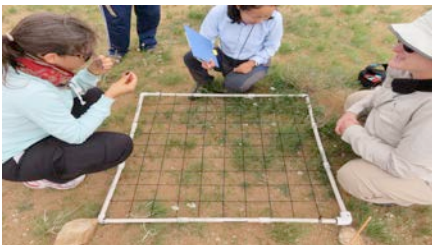
○担当者 : Sumiya (スミヤ) : モンゴル国立大学の修士課程の学生

Tuvshee (トゥルシェ) : モンゴル国立大学の修士課程の学生

保護区内をいくつかの地域に分け、各々の地域でどのような植物がどの程度の割合で生えているかを、1 m四方のゲージ内で調べる。ゲージはさらに10 cmの枠100個に分けられていて、それらの中に納まる植物の種類、数、占有率、草丈などを細かく記録する。約10 m四方のエリアの四隅と真ん中の計五か所調べたら、別の場所へ移動する。そもそもの保護区内の植生調査ももちろんなのだが、現在調べている場所は、①家畜類が草を食べていると予想される場所②アルガリヤシベリアンアイベックスなどが生息している＝草を食べていると予想される場所、の2種類だとのこと。①と②で植物の種類や育ち方や種類の差異を調べることで、アルガリヤシベリアンアイベックスが何をどの程度食べているのか、が解れば、彼らの保護と繁殖のためにどのような植物(餌)が必要となるか、の解明につながる事が期待される。現在は、アルガリヤシベリアンアイベックスの生息場所から、餌場を予測して植生(食性)を調べていて、既に保護区を外れた場所に調査に入っている。

※感想

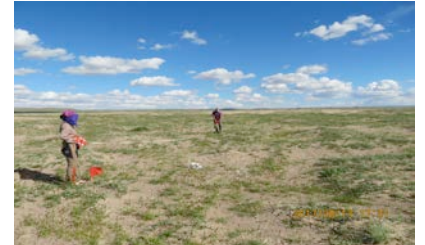
大変な重労働で、毎日調査を希望する者も少なかった(が、全員が平等?になるよう参加を心がけた)。今年のモンゴルは特別暑い日が多く、灼熱の太陽の下、じっとしゃがんで下を向いて作業をすることはかなりの体力を奪われた。意識が朦朧とすることもあり、途中で昼寝休憩をいれたり、水分をしっかりとるように皆で声かけをしたりして何とか乗り切った。担当者の Sumiya は30種類以上の植物を的確に見分けて、すべての学名を諳んじて言えた。また、よく似た外見の2種類の植物を「juicy (水分が多い)」か「not juicy (水分が少ない)」かで見分けるのには驚いた(笑った)。一見砂漠のようにほとんど何も生えていないように見える地面にも、何種類もの植物がたくましく根付いていることに、改めて気づかされた貴重な体験であった。



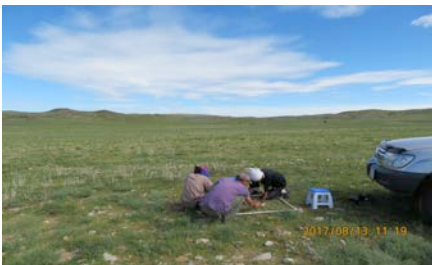
3, 4人のチームで数える



現在は保護区外にまで調査地が広がっている



砂漠地帯では1 m²区画の植物すべてを採取して調査



灼熱の太陽の下で黙々作業



すべての植物を回収



調査用紙に細かく書き込む

調査5 : 新種のヤマトオサムシダマシ (*Tenebriouidae* Blaps) の探索、

ならびに Ikh Nart 保護区内の地表徘徊系甲虫の同定や生息分布調査

○担当者 : Jigee (ジギー) : モンゴル国立大学の修士課程の学生

保護区内のいくつかのエリアで、地中に小さなバケツや植木鉢を1か所あたり10個埋めて、落ちてきた昆虫を集めるピットフォールトラップをしかけた。特にオサムシ系は地表徘徊系の甲虫なので、このトラップが有効である。仕掛けてから2～3日経ってから回収し、すべての虫を1トラップごとに分けて、ピンニングする。特に、担当者のジギーの目的はゴミムシダマシ系の新種発見である。集めた虫はすべて、モンゴル国立大学の研究室に持ち帰り、一匹一匹顕微鏡下で観察し分類し、新種の発見につなげたいとのこと。

※感想

この調査の担当をしているジギーは、若くてとても美しい女性である。そこで正直に「なぜオサムシ（などという少々気持ち悪い虫（失礼））を調査対象にしたの？女性では珍しいでしょ？」と尋ねると、「そこが狙い」と、これまた正直に答えてくれたので思わず笑ってしまった。女性で虫の研究を専門にしている人は少ないので、注目されたり、留学できたりするチャンスが広がると考えたようだ。実際に、デンバー動物園にも行ったし、修士課程の後はオーストラリアの大学に留学して博士課程に入りたい、と言っていた。「日本はダメ？」と聞いてみると、「奨学金がない」そうである。



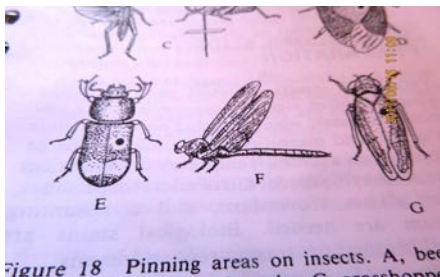
ピットフォールトラップ（水入り）



こちらは水なしトラップ



回収しました



針を刺す場所の資料



ピンニング中



大量のオサムシたち！

調査6：アゲハチョウ（swallowtail butterfly）の生態数調査

○担当者 Jigee：（ジギー）：モンゴル国立大学の修士課程の学生

ベースキャンプ裏手の、川（途中から地中に水脈はもぐってしまう小さな川）周辺にて、アゲハチョウの捕獲、ナンバリングを行う。どの程度の数が生息しているかの調査だそう。毎日夕方になると、アゲハチョウが水場に寄ってくる。そこを虫取り網で捕獲し、羽にナンバーを書き込んで一匹一匹写真を撮って記録する。草原の中の少ない水場には、動物も虫も集まるのか、一度に二匹も三匹も捕獲できる。キャンプ滞在中の調査期間（約10日間）、夕方の1時間の捕獲のみで約100匹捕獲できた。

※感想

虫取り網一つに、一度に3匹もアゲハチョウが入る経験を、生まれて初めてした。そっと近寄って、止まっているチョウたちの上から網を落とすようにして、一網打尽。わずか1時間程度で11匹も捕獲した。この調査は去年から続けているようで、ジギーがスマホで記録写真を撮っていた。また、この水場には放牧されている馬もやってきて水浴びをして、水を飲んでいて。



水辺を歩くジギー



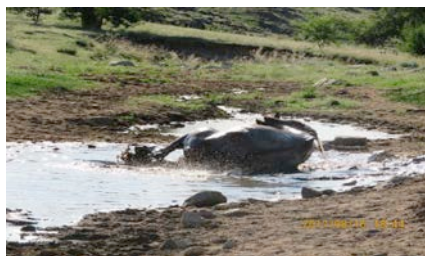
羽にナンバリング



一度に2匹捕獲!



写真をとって保存



水浴びする馬



白と黒の2頭が仲良く

調査7: ナキウサギ (Pika)、ならびにコサックギツネ (corsac fox) アナグマ (Eurasian badger) などの肉食動物 (carnivores) の生態調査

○担当者: Emma (エマ): Stanford 大学の学生

Oogii (オギ): モンゴル国立大学の修士課程の学生

保護区内で、肉食小動物 (ナキウサギ、キツネ、アナグマ、ヤマネコなど) の目撃情報があったり、捕獲されたりした場所とその周辺を中心に、岩の間、低木の下、土の中などにある、肉食小動物のものと思われる巣や足跡、糞などを探して歩く。50mの幅で一人ずつ配置し、一定方向に歩きながら見つけた痕跡の場所情報を、一つ一つGPSで記録していく。巣の中に糞があることも多く、それが新鮮か古いかによって行動範囲や生息地の予想を立てて、赤外線カメラを10台/一カ所設置しておき、1日2日経ってから回収しに行き、映像を分析する。今回の解析では、目的のPika (ナキウサギ) の姿を映像にとらえることはできなかったが、キツネの姿は映っていた。また、めったにお目にかかれないという、マヌルネコ (またの名をモウコヤマネコ: Pallas's cat) らしき映像も撮れていたなので、担当のEmmaは大学に戻ってから詳細に分析すると興奮気味に話してくれた。

※感想

巣やふん、食べかすなどを探すが、最初のうちは探し方、見つけ方が解らなかなり苦戦した。専門用語も多く、英語で指示されたことが解らなかつたり、記録の取り方もGPSの使い方もなかなか習得できなかつたりして、難しい調査の一つだった。また、岩場の上っていくことも多く、体

力が必要だと実感させられた。また、赤外線カメラを設置してもなかなか（当たり前だが）目的の動物は映っておらず、これまた根気が必要だと感じた。また、Pika（パイカ：ナキウサギ）という言葉は初めて聞き、始めは「ピカ」と読んでしまった。しかし、どうやら英語が母国語のアメリカ人にとってもピカとしか読めないらしく、パイカと読めない、という話題でしばらく盛り上がった。



岩場の上って巣や糞などを探す



古い巣を発見



小動物の足（手）の骨



このような調査用紙に見つけた
巣や糞を記録する



GPS



赤外線カメラ

4) 今回の参加によって得られたこと

①野生生物調査の困難さと研究者の地道で長期にわたる努力

・野生の生き物は基本的に、夜行性だったり警戒心が強かったりして、捕獲はもちろんのこと、観察することすらなかなか難しい。アルガリもシベリアン・アイベックスも、遠い岩場にいる姿を見ることはできても、近づこうとしたり、足音をたてたりするだけでサッと逃げてしまう。これらのめったに出会わない、出会えない動物の生態を、最低限の犠牲の元に調査するには、適切なメソッドを見付けたり工夫して作り出したりして用いることと、それらを続ける根気と熱意が必要なのだと、短期間のボランティア活動でも十分に実感することができた。そして、それらの根気強い調査を長年続けた人たちの過去の知見が、大いに役立つことから、積み重ねて続けていくことの大切さを携わる人全員が理解していたことが素晴らしかった。改めて、地道な活動により自然保護を行う研究者や団体への尊敬の念が生まれた。

②少ない資源を有効利用して、自然に優しいシステムを構築

・モンゴルの国土には砂漠があり、雨もあまり降らないので水は貴重な資源の一つである。キャンプ内でも、水はトラックの後ろにタンクを積んで近くの湧き水をくんできていた。そこから飲み水も、シャワーも、洗濯の水もって使った。特にシャワーは、サンシャワーといって、日中にビニール袋に入れた水を、直射日光があたる岩場に置き温まったものを使用した。曇りの日には使えないシステムだが、概ね晴れの日が多いモンゴルでは十分に温かい水でシャワーが浴びられた。また、食器を洗う水も、桶を3つ用意して、残飯を捨てた皿を1つ目に入れて洗い、2つ目の桶に写して洗い流し、3つ目の最後の桶でさらに洗い流してラックに入れて干す、という形だった。これ

ならば、水は最小限で済むし衛生面でも十分に皿は綺麗に洗えていた。そして、トイレに至っては、用を足したら馬の乾燥した糞を上にかぶせる、というエコトイレだった。乾燥地帯だからとはいえ、驚くほど臭いがせず、日本の水洗トイレよりもずっと衛生的且つ清潔感すらあった。貴重な水をできるだけ使わず、それでいて衛生面も考えられていて実に合理的であった。ちなみに、用を足していっぱいになった便器内の桶は、トイレの後ろの小窓から取り出して、中身をドラム缶で燃やしていた。

少ない資源を有効に利用していくシステム、無駄を省く「たるを知る」生活を実感できた。



食器を洗う3つのたらい



岩の上で水を温めるサンシャワー



馬の糞をかけるエコトイレ



トイレの後ろ側



貴重な水のタンク

③モンゴルの大学生の勉強熱心さ、たくましさ、生きる力

・今回ご一緒したモンゴル国立大学の学生たちは、全員が英語を理解し十分な知識を有し、円滑なコミュニケーションをはかれた。モンゴルの大学進学率は90%ほどらしく、教育熱は高い。そして、より専門性の高い教育を受けたい者は、中国や韓国に行って勉強する。さらに、一部の恵まれた者だけがアメリカやオーストラリアに行けるのだという（ちなみに、あまり日本は人気がなかった）。今回のモンゴルの学生たちはほとんどが修士課程、あるいは博士課程の学生だったので、より野心をもっていて頼もしく感じた。改めて、厳しい競争や環境に晒されて勉強への意欲や熱意が高まっている様子うかがえて、日本の学生はいったいどうだろうか、と考えてしまった。

また、彼らの日ごろの生活、生き立ちも日本のそれとは大きく違ってとても興味深く話を聞いた。一人を除いて全員がゲルで生まれ育ち、多くの兄弟の中で育っているという。厳しい環境の中で生まれ育っているが、素朴で素直な子が多い。キャンプ中に、ヤギを解体してバーベキューする機会があったのだが、若い子達が見事なナイフさばきでスルスルと関節を外したり、手を使って皮をはいたり、内臓を洗ったりする様に感心させられた。幼いころからごくごく普通に、ヤギを解体して食べてきたという。生きる力、とはこれだ、と思わされた。生きることとは食べることであり、食べることは他の生き物の命を頂くことである、という基本を思い出した。そして、その命を頂くことと、命を守ること（自然保護）、一見矛盾するような価値観を内包して生きていくのが、人間という存在なのだなと哲学的な思いにも至った。

便利で近代的な生活を手に入れた日本人ではあるが、そのために大切な「生きる力」のいくつかが失われたのだろうか、ということをしみじみと感じた。



協力してヤギを素早く絞める



若い Zaya が解体していく



みんなで内臓を洗う

5) 授業実践 (12月上旬実施予定)

○アースウォッチプロジェクトの理念や、今回の参加によって得た知見や知識、を子どもたちに伝えるにあたり、本校の子ども達の実態や発達段階を考慮し、主に高学年の5、6年生に、授業実践を行うこととした。大きなテーマとしては、理科分野「動物・植物・自然」、市民科分野「異文化交流・他者理解」、社会科分野「世界と日本、日本の貢献」の3観点で授業の組み立てを考えた。

まず、理科については具体的に「植物のからだのはたらき」と「地球に生きる」をテーマに、授業実践を行う。モンゴルという国の地理的な位置や成り立ちや生態系を大まかに紹介し、今回の IkhNart 保護区内の植物や動物などを紹介し、それらを写真や動画で紹介する。動物園でしか見たことがない動物や、図鑑でしか見たことがない植物が目の前に、手に触れられる場所にあることの感動、それらを守ることの意義や意味、地道な活動を伝えたい。

次いで、市民科「相手を認めることの大切さ」をテーマに、モンゴルの人々の生活を食事や住居などの写真、動画などで紹介していく。また保護活動によせる思いや、その価値を認めていくことの大切さも伝えらえたら、と考えている。そして、モンゴルについてだけではなく、多くの国から参加するボランティアや研究者たちと接して考えたこと、異文化に対する思いやスタンスなども伝えたい。

そして、3つ目の社会科は「世界の中の日本」ということで、モンゴル人から見た日本、日本（アースウォッチ）がどのように世界の自然保護に貢献しているか、の活動を伝えたい。日本は日本だけで地球上に存在しているわけではなく、自然は海も空もつながっていて、自国の自然だけを守ればいけないわけではなく、ことが感じられる写真、資料、講話を行う。

○子ども達だけにではなく、特に職場の同僚の教員たちに、今回の経験から得たこと感じたことを話してみた。多くの教員たちが、モンゴルという国に行ったことがなく、またボランティアで自然保護活動を手伝いに海外に出向く、というプロジェクトがあることを知らなかった。知らない国で、やったこともない活動をする、そして英語を話したり聞いたりしないといけないことから、自分には無理かもしれないという反応も多く見られた。しかし、ぜひ挑戦したいという教員もいて、私自身もこの体験をぜひしてほしい、という思いを伝えた。

写真や動画は、とても興味深く見てくれた同僚が多かったし、これは子どもたちにぜひ見せるべきであると皆が口をそろえて言ってくれた。

最後に

○今回私は、このアースウォッチプロジェクトに応募した作文の中に、「これを伝えたい」と最も強く思ったことを書いた。それは、「ネットやTV画面の中で見て知っている、雄大な自然の景

色、動植物、異文化交流は、少し勇気を出して一步を踏み出せば目の前に現れて体験できる」のだというのを、私が体現して子どもたちに見せたい、ということである。

そして、その思いが実現して、それを終えて帰ってきた今、やはりこの「少しの勇気」は子ども達にも、そして大人たちにも伝えたいことだと再確認した。というのも、今回の体験を通して、理学的視点や社会的視野等からの考えは様々あるが、総合的に何が大切かと言えば「行動すること」であったな、と思うのである。

何事も、考えるだけでは事態は動かない。自然保護についても、一步踏み出さなければ絵に描いた餅である。もちろん、だれもが海外に行かなくても、たとえば日々手洗いする水を流しっぱなしにすることを止めてみたり、保護活動に募金をしてみたり、「少しの勇気」でできることはたくさんある。そして、小さなことからでもコツコツと、一人一人が行動することが、大きな変化や成果を生む確実かつ唯一の方法であるということも、今回私が伝えたいことである。

私が勇気を出して、アースウォッチに応募して選んで頂き、今まで記してきた思いや学びを得たことを、余すところなく子ども達、周囲の大人たちに伝え、大きなテーマである「自然保護」に小さな一步、しかし確実な一步として貢献したい。